

授受動詞「くれる」の受益者は、「私」と  
どれだけ近い人なのか？  
—重回帰分析による世代差の検証—

福盛 貴弘

How is Acceptability of the *kureru* Construction Affected by  
Age and Degree of Relationship to the Beneficiary?

FUKUMORI Takahiro

**abstract**

This study investigated how acceptability judgements regarding the *kureru* construction vary depending on the degree of relationship between the respondent and the beneficiary, examining the effect of such factors as [senior], [junior], [peer], [friend], [family], and [child]. The highest levels of acceptability were recorded for siblings, children and grandchildren as beneficiaries. There was an effect from the generation of the respondent: older respondents reported generally higher acceptability levels for the construction. The factor of generation also interacted with several other factors. Among the youngest respondents (in their teens and 20s), the factor of [family] had more effect on acceptability than did [friend]; but this was reversed among older respondents. Among respondents in their 40s or older, there was an additional significant contribution from the factor of [child].

キーワード：授受動詞 文法的親近性 受益者と「私」の関係 偏回帰係数 世代差

**1. 序**

福盛 (2019) において、「太郎は千春にプレゼントをくれた。」という構文に対し、「太郎」は私 (= 回答者) の友人である。では、「千春 (ちはる)」は？」というアン

ケート調査を行なった。「千春」と「私」の関係がどの程度近しければ、「くれる」の受益者になれるのかということを調査することが目的であった。そこで、「私」という1人称に対する関係性を示した項目を、理解率をふまえて以下のグループ分けを設けた。

- (1) a. {妹、弟} > b. {子供、孫} > c. {友人、幼なじみ、親友、いとこ、恋人}  
> d. {妻、夫} > e. {姉、兄} > f. {教え子、部下、執事} > g. {相棒、同僚} > h.  
{母、父}

これらのグループに対し、[上][下][家族][子][同胞][友人]という素性を設定した。

(2) それぞれのグループにおける素性表示

- a. [-上][+下][+家族][-子][+同胞][-友人] {妹、弟}  
b. [-上][+下][+家族][+子][-同胞][-友人] {子供、孫}  
c. [-上][-下][-家族][-子][-同胞][+友人] {友人、恋人 etc.}  
d. [-上][-下][+家族][-子][-同胞][-友人] {妻、夫}  
e. [+上][-下][+家族][-子][+同胞][-友人] {姉、兄}  
f. [-上][+下][-家族][-子][-同胞][-友人] {教え子、部下、執事}  
g. [-上][-下][-家族][-子][-同胞][-友人] {相棒、同僚}  
h. [+上][-下][+家族][-子][-同胞][-友人] {母、父}

(2) をふまえて、素性からダミー変数を指定することにし、+を1、-を0として重回帰分析を行なった。結果として、プラスの偏回帰係数は[友人]>[同胞]>[子]>[家族]>[下]の順となり、マイナスの偏回帰係数は[上]となった。それぞれの素性に対する偏回帰係数が、親近性の要因を示すことが確認された。

ただし、この結果は全回答者を対象とした集計結果であり、世代間において要因は変わってくるのではないかという疑問を抱いた。これをふまえて、本稿では、世代別の結果を示し、1人称に対する文法的親近性に対する要因がどのように異なるのかを検証することにした。

## 2. 調査方法

google アンケートフォームを用いて、2018年6月9日から2019年9月23日まで調査を行なった<sup>1)</sup>。

<フェイスシート>

年齢：10代、20代、30代、40代、50代、60代以上

性別：男、女 ※必須ではない。

小学校の時に住んでいた都道府県：47都道府県、その他

※日本語母語話者であればどこに住んでいてもかまわない。

<調査項目>

太郎は千春にプレゼントをくれた。

・「太郎」は私（＝回答者）の友人である。では、「千春（ちはる）」は？

1. <理解できるかどうか> 以下の選択肢は、「私」との関係を示しています。その関係であれば、回答者自身が自然に理解することができる選択肢に✓をつけてください。（複数可）

2. <使えるかどうか> 以下の選択肢は、「私」との関係を示しています。その関係であれば、回答者自身が自然に使うことができる選択肢に✓をつけてください。（複数可）

私の母、私の妻、私の友人、私の幼なじみ、私の孫、私の上司、私の兄、私のおばさん、私の姉、私の先生、私の恩師、私が大ファンの歌手、私の部下、私のい  
とこ、私の妹、私の友人の友人、私の父、私の親友、私の同僚、私のおじさん、  
私の恋人、私の弟、私の執事、私の知り合い、私の祖母、私の相棒、私の教え子、  
私が好きな歌手、私の子供、私の祖父、私の夫、私のご主人様

（提示順）

集計結果に対して、数量化1類を適用した。これによって、得点と素性の関係を示し、素性に対する偏回帰係数を算出した<sup>2)</sup>。

<sup>1)</sup> 福盛（2019）は、2019年1月9日までの結果の中間報告（989名）である。その後、2019年9月23日まで公開したが、それ以上増やす策が尽き、9月23日をもって公開を止めた。

<sup>2)</sup> 福盛（2019）において、説明変数とされているものは、偏回帰係数の誤りである。

### 3. 結果

#### 3.1 回答者内訳

表 1-1：回答者内訳（性別、地域別） 総数 1,221 名

	計	男	女	無回答	北海道 東北	関東	中部	近畿	中国 四国	九州	その他
10 代	419	195	218	6	51	265	43	10	17	33	0
20 代	557	295	260	2	59	349	69	21	17	31	11
30 代	104	34	70	0	8	69	10	6	5	6	0
40 代	78	32	44	2	2	35	8	13	9	10	1
50 代	47	15	32	0	6	25	5	2	5	4	0
60 代以上	16	11	5	0	1	10	2	1	2	0	0

表 1-2：回答者内訳（都道府県別） 総数 1,221 名

北海道	17	埼玉県	333	岐阜県	3	鳥取県	3	佐賀県	9
青森県	24	千葉県	58	静岡県	36	島根県	3	長崎県	9
岩手県	12	東京都	145	愛知県	19	岡山県	14	熊本県	9
宮城県	10	神奈川県	73	三重県	6	広島県	15	大分県	4
秋田県	7	新潟県	35	滋賀県	5	山口県	6	宮崎県	8
山形県	21	富山県	5	京都府	5	徳島県	3	鹿児島県	5
福島県	36	石川県	1	大阪府	14	香川県	1	沖縄県	5
茨城県	61	福井県	3	兵庫県	16	愛媛県	7	その他	12
栃木県	32	山梨県	8	奈良県	4	高知県	3		
群馬県	51	長野県	27	和歌山県	3	福岡県	35		

### 3.2 回答結果

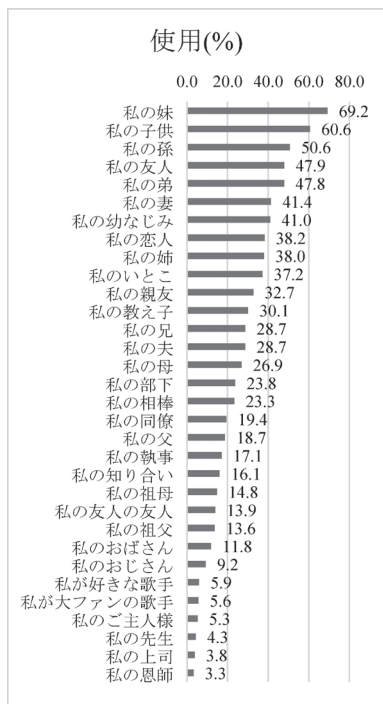
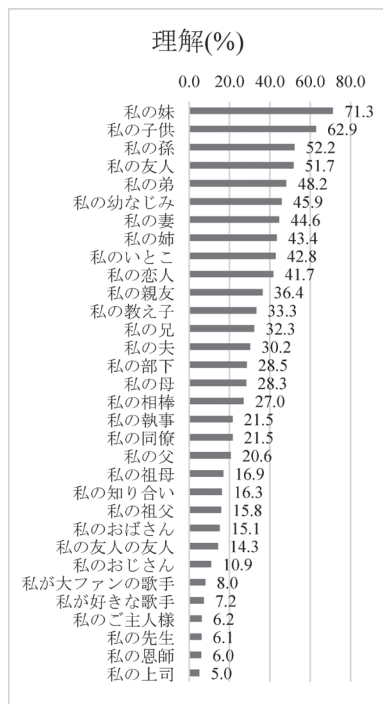


図 1-1：理解できるの全回答結果（％）

図 1-2：使用できるの全回答結果（％）

### 3.3 世代別の結果

表 2-1：理解できるかに対する得点の世代別一覧

	10 代		20 代		30 代		40 代		50 代		60 代以上	
a	a	0.533	a	0.583	a	0.666	a	0.671	a	0.808	a	0.634
b	b	0.498	b	0.558	b	0.750	b	0.750	b	0.777	b	0.657
c	c	0.417	c	0.452	c	0.446	c	0.418	c	0.519	c	0.513
d	d	0.321	d	0.374	d	0.493	d	0.534	d	0.522	d	0.491
e	e	0.345	e	0.386	e	0.473	e	0.464	e	0.447	e	0.491
f	f	0.245	f	0.290	f	0.315	f	0.318	f	0.391	f	0.452
g	g	0.187	g	0.240	g	0.281	g	0.299	g	0.297	g	0.384
h	h	0.191	h	0.226	h	0.334	h	0.344	h	0.255	h	0.415

表 2-2：理解できるかに対する得点の世代別一覧（偏回帰係数が高い順）

	10 代		20 代		30 代		40 代		50 代		60 代以上	
1	a	0.533	a	0.583	b	0.750	b	0.750	a	0.808	b	0.657
2	b	0.498	b	0.558	a	0.666	a	0.671	b	0.777	a	0.634
3	c	0.417	c	0.452	d	0.493	d	0.534	d	0.522	c	0.513
4	e	0.345	e	0.386	e	0.473	e	0.464	c	0.519	d	0.491
5	d	0.321	d	0.374	c	0.446	c	0.418	e	0.447	e	0.491
6	f	0.245	f	0.290	h	0.334	h	0.344	f	0.391	f	0.452
7	h	0.191	g	0.240	f	0.315	f	0.318	g	0.297	h	0.415
8	g	0.187	h	0.226	g	0.281	g	0.299	h	0.255	g	0.384

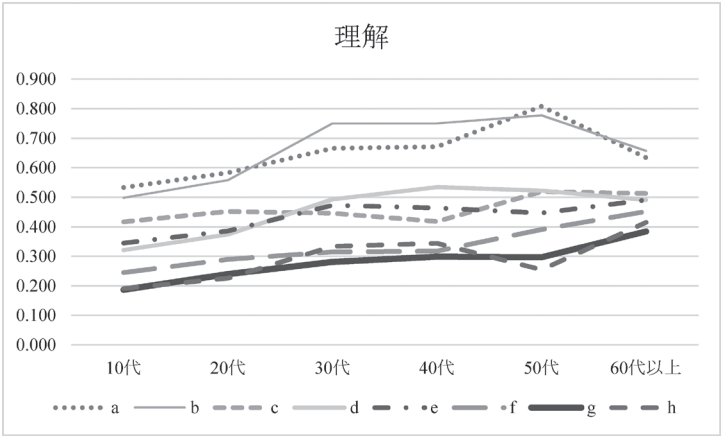


図 2：理解できるかに対する世代別の得点比較

表 3：理解できるかに対する偏回帰係数の世代別一覧

	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代以上
上	-0.130	-0.148	-0.159	-0.190	-0.267	-0.076
下	0.058	0.050	0.034	0.018	0.093	0.068
家族	0.134	0.134	0.212	0.235	0.225	0.107
子	0.119	0.134	0.223	0.198	0.161	0.098
同胞	0.154	0.160	0.139	0.119	0.193	0.076
友人	0.231	0.212	0.165	0.119	0.222	0.128
定数項	0.187	0.240	0.281	0.299	0.297	0.384

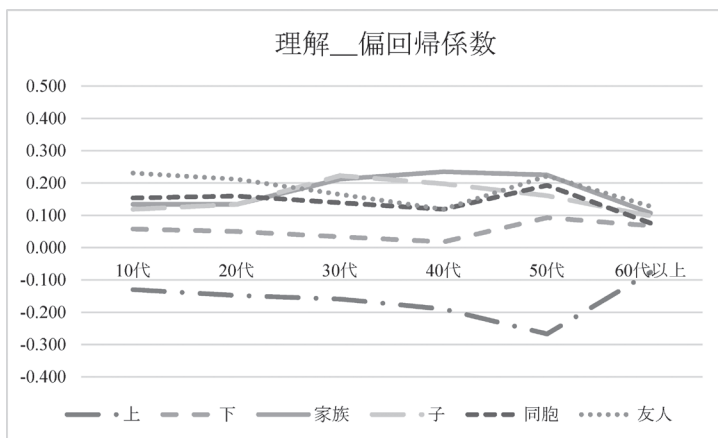


図3：理解できるかに対する偏回帰係数の世代別比較

(3) 理解できるかに対する得点における傾向<sup>3)</sup>

- ・ a. {妹、弟}、b. {子供、孫} については、全ての世代で5割以上が親近性があり、30代を超えると、bがaを上回る。
- ・ c. {友人、幼なじみ、親友、いとこ、恋人}、d. {妻、夫}、e. {姉、兄} については、30代を超えると、dの順位が上がり、cが下がる。
- ・ f. {教え子、部下、執事}、g. {相棒、同僚}、h. {母、父} については、30～40代において、hが上がる。

## (4) 理解できるかに対する偏回帰係数における傾向

- ・ 10代から40代にかけて、[上][友人]は下がっていく。
- ・ 10代、20代に対して30代、40代は、[家族][子]は上がり、[同胞]は下がる。

<sup>3)</sup> 50代、60代以上については、回答者総数が少ないため、以降で結果を扱うにあたって参考程度に扱う。

表 4-1：使用できるかに対する得点の世代別一覧

	10 代		20 代		30 代		40 代		50 代		60 代以上	
a	a	0.512	a	0.558	a	0.688	a	0.654	a	0.768	a	0.548
b	b	0.484	b	0.542	b	0.692	b	0.744	b	0.777	b	0.594
c	c	0.388	c	0.416	c	0.387	c	0.336	c	0.472	c	0.363
d	d	0.305	d	0.368	d	0.466	d	0.513	d	0.509	d	0.421
e	e	0.300	e	0.348	e	0.480	e	0.417	e	0.477	e	0.421
f	f	0.228	f	0.249	f	0.279	f	0.269	f	0.339	f	0.302
g	g	0.165	g	0.198	g	0.216	g	0.244	g	0.300	g	0.235
h	h	0.157	h	0.209	h	0.322	h	0.301	h	0.257	h	0.360

表 4-2：使用できるかに対する得点の世代別一覧（偏回帰係数が高い順）

	10 代		20 代		30 代		40 代		50 代		60 代以上	
1	a	0.512	a	0.558	b	0.692	b	0.744	b	0.777	b	0.594
2	b	0.484	b	0.542	a	0.688	a	0.654	a	0.768	a	0.548
3	c	0.388	c	0.416	e	0.480	d	0.513	d	0.509	d	0.421
4	d	0.305	d	0.368	d	0.466	e	0.417	e	0.477	e	0.421
5	e	0.300	e	0.348	c	0.387	c	0.336	c	0.472	c	0.363
6	f	0.228	f	0.249	h	0.322	h	0.301	f	0.339	h	0.360
7	g	0.165	h	0.209	f	0.279	f	0.269	g	0.300	f	0.302
8	h	0.157	g	0.198	g	0.216	g	0.244	h	0.257	g	0.235

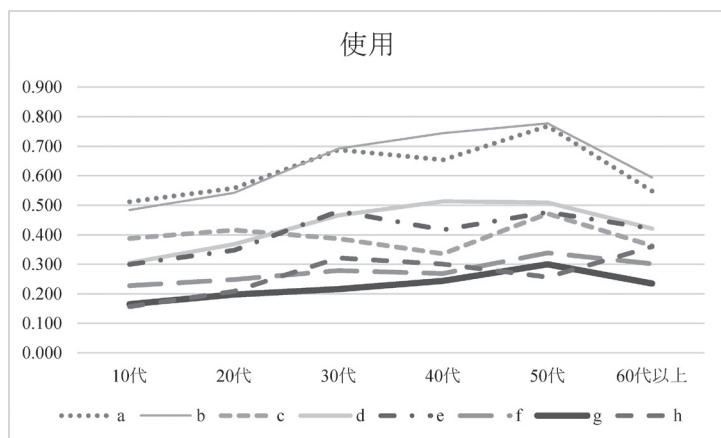


図 4：使用できるかに対する世代別の得点比較



表5：使用できるかに対する偏回帰係数の世代別一覧

	10代	20代	30代	40代	50代	60代以上
上	-0.149	-0.159	-0.144	-0.212	-0.252	-0.061
下	0.063	0.052	0.063	0.026	0.039	0.066
家族	0.141	0.170	0.250	0.269	0.209	0.186
子	0.115	0.123	0.163	0.205	0.228	0.107
同胞	0.144	0.139	0.158	0.116	0.220	0.061
友人	0.223	0.218	0.171	0.092	0.172	0.127
定数項	0.165	0.198	0.216	0.244	0.300	0.235

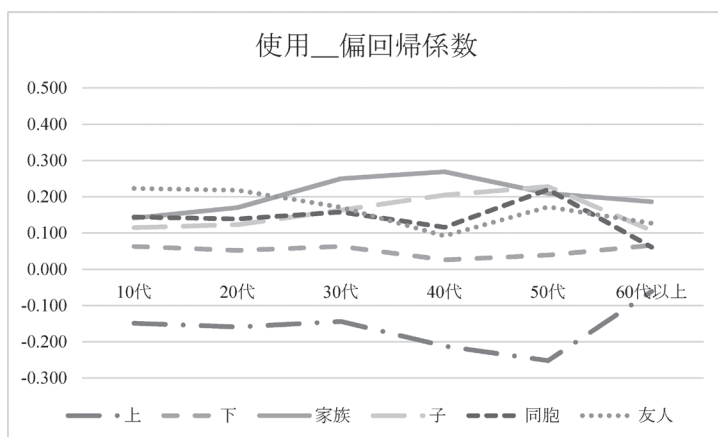


図5：使用できるかに対する偏回帰係数の世代別比較

## (5) 使用できるかに対する得点における傾向

- ・ a. {妹、弟}、b. {子供、孫} については、全ての世代で5割以上が親近性があり、30代を超えると、b. が a. を上回る。
- ・ c. {友人、幼なじみ、親友、いとこ、恋人}、d. {妻、夫}、e. {姉、兄} については、30代を超えると、d の順位が上がり、c が下がる。
- ・ f. {教え子、部下、執事}、g. {相棒、同僚}、h. {母、父} については、30～40代において、h が上がる。

## (6) 使用できるかに対する偏回帰係数における傾向

- ・ [上] [同胞] [友人] は、40代で下がる。
- ・ 10代、20代に対して30代、40代は、[家族] [子] は上がる。

## 4. 考察

考察するにあたって、理解と使用において理解より使用の方が得点が下がるという以外の傾向性は得られなかったため、本稿ではこの違いについてはふれていないことをあらかじめ断っておく。また、受け入れられる度合いが低いという線引きとして、理解率 20%未満となる項目については、考察の対象外とした。

### 4.1 得点

グラフが交わる、すなわち順位が入れ替わることをふまえると、(7) の群に分けられ、以下のような特徴が挙げられる。

(7) I 群 a, b > II 群 c, d, e > III 群 f, g, h

10 代は全ての群において、他の年代と比べて得点が低い。また、10 代の I 群は、30 代および 40 代の II 群に相当する。

10 代から 40 代にかけて、世代が上がるにつれ、得点が上がる。0.500 以上となるのは、10 代では a、20 代と 30 代は a, b、40 代は a, b, c である。0.600 以上となるのは、30 代と 40 代の a, b である。

### 4.2 偏回帰係数

素性に対する偏回帰係数について、以下のような特徴が挙げられる。

0.200 以上となるのは、10 代、20 代は [友人]、30 代は [家族]、40 代は [家族] [子] である。

10 代、20 代は [友人] が [家族] より大きい、30 代以上では逆転する。また、10 代から 40 代にかけて、世代が上がるにつれ、[子] の偏回帰係数が上がる。

### 4.3 世代差

全世代において、a と b の得点が高い。ともに [家族] であり、[同胞] と [子] との違いであるが、両者について 30 代以上では [子] の偏回帰係数が相対的に大きくなっている、a より b の得点が上がる。また、相対的に d の得点が上がることを含め、これらは回答者の中で結婚する人がいたことによって価値観が変わったからという推測が成り立つ。

10 代、20 代にとっては、[友人] は [家族] よりも近い要因といえる。ただし、[家族] は [下] [子] [同胞] と結びつくことでさらに得点が上がる。したがって、c が最も近い関係とはならない。

上下関係においては、世代差があるとは言えない。目上、年上であっても老いと

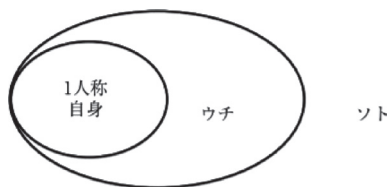
もに気持ちとしては下になっている関係もあるが、それは本データからは析出できない。

#### 4.4 数値があらわす意味

言語における社会習慣的型、換言すれば社会的に受け入れられる度合いを示しているとして想定すれば、使用できるかに対する得点が、規範的か否かを示す指標と考えられる。ただし、ランクをなす体系とみなすにはばらつきが大きく、本研究の調査結果による得点は、コセリウ（Coseriu）が言うところのノルマ（norma）に相当すると捉えられる。コセリウは、ソシユールのランク観を批判するにあたって、言語の機能的四段観として、類型（tipo；ランクの上位概念）、体系（sistema；ソシユールのランクに相当）、規範（norma）、言（parlare concreto；ソシユールのパロールに相当）を提唱した。たとえば、コセリウ（1979：274）では、イタリア語において機能的区別がある /e/ を体系とし、機能的ではない [é] や [è] を規範と捉えている。本研究に適用するなら、「くれる」の受益者となる「ウチ（1人称ならびにそれに近い人）」<sup>4)</sup>が体系をなし、1人称にとって近い人となる弟妹、子孫、友人や恋人、夫妻、兄弟などがノルマを構成するものと捉えられる。「くれる」の受益者において、1人称となる「私」は典型的な規範性を有するのに対し、「私」に対して文法的親近者となる人については、本研究では得点によるランク付けがなされ、人によって受け入れられる度合いが変わっていると言える。そして、(7) で示されたように、[+家族][+下]であるⅠ群の弟妹や子孫が、「くれる」の受益者になりうるという意味での文法的親近性においては、「私」に最も近い存在<sup>5)</sup>であることが、確認できたことになる。

なお、本研究での得点は、個人差を合算して相殺されたものであり、すべての人の脳内で一律の言語処理が行なわれるという仮説は成り立たない。人によって規則や制約は異なる。たとえば、筆者の内省では、弟妹は「くれる」の受益者としては、理解はできるが使用しない。

<sup>4)</sup> 福盛（2018：28）によって、以下のように図示されたものである。



<sup>5)</sup> 最も近いとはしたものの、福盛（2018）において、「私の妹」を「くれる」の受益者と捉えられるかという文法的判断として、「ウチ」に入らない回答者が一定数いたことが既に指摘されている。

(8) 筆者の内省による規則

- |                         |               |
|-------------------------|---------------|
| ① [+家族] でなければならない。      | a, b, d, e, h |
| ② [+上] は除外される。          | a, b, d       |
| ③ [+下] なら、[+同胞] は除外される。 | b, d          |

(福盛 2019)

## 5. 結語

本研究では、「くれる」の受益者として、1 人称としての「私」にどれだけ近い人が該当するかについて検証してきた結果、弟妹や子孫が最も近い関係であることが明らかになった。また、世代差があることが確認され、世代が上がるにつれて、彼ら彼女らを受け入れられる度合いが上がってくる。素性別に見てみると、10～20 代は「家族」より「友人」の偏回帰係数が高いのに対し、30 代以上では逆転する。さらに、40 代以上では、「子」が加わってくることが確認できた。ただし、この結果は実際の心的距離を反映しているわけではなく、文法性判断による文法的親近性によるものであることに注意を払わなければならない。さらにいえば、教育現場における規範文法を考えるにあたって、得点のどこで線引きをすればいいのかについては、まだ課題が残されている。いわゆる正しい日本語の調査においては、本来の用法と派生した用法とを比べて、どちらを用いる人が多数派かということを確認しているが、これはどちらも正しいとも解釈できるので、傾向性を示しているに過ぎない。本結果も、1 つずつを見ればそういう傾向性を示していることになるが、体系の中での規範性を見渡している点で、若干性質が異なる。とはいえ、「くれる」の受益者として、典型的な規範性を有する「私」を基準として、どこまでを規範とするかは、難しい問題である。しかし、あえて言うなら、I 群とした弟妹や子孫については、ある程度の規範性を担っていると捉えても良いように思われる。

さて、本稿で用いた方法論について、他の理論にも適用できないかと考えてみたが、以下のような適用が可能ではないかと思える。それは、Brown and Levinson (1987) によるポライトネス理論に対してである。同理論では、以下のような式が提唱されており、計算結果がプラスであればあるほど、FTA (Face Threatening Act) を軽減する必要がある。

(9) B&L ポライトネス理論

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

$W_x$	行為 $x$ のフェイス侵害の度合い
$D(S, H)$	話し手 (S) と聞き手 (H) の社会的距離
$P(H, S)$	聞き手 (H) の話し手 (S) に対する力
$R_x$	特定の文化において行為 $x$ が相手にかける負荷度の順位

この式を日本語に適用する際の一例として、以下の式を設定したい。

(10) 日本語の待遇表現

$$\text{敬意} = \begin{matrix} \text{疎} \\ \text{親} \end{matrix} \begin{Bmatrix} (+) \\ (-) \end{Bmatrix} + \begin{matrix} \text{上} \\ \text{下} \end{matrix} \begin{Bmatrix} (+) \\ (-) \end{Bmatrix} + \begin{matrix} \text{外} \\ \text{内} \end{matrix} \begin{Bmatrix} (+) \\ (-) \end{Bmatrix} + \alpha$$

これによって、たとえば敬語使用において上下関係に関して希薄になっていることが、偏回帰係数から説明できるのではないかと推測している。

本研究では、素性に対して偏回帰係数を算出することによって、素性間ならびにプラスマイナス間が等価ではないということの傍証になったのではないかと感じている。ただし、これは多くの適用例が必要であるため、今後の課題は多い。そうは言いながらも、音韻論から始まった弁別素性が、文法や意味の分析でも適用される際に、その妥当性について真面目に論じられてこなかったことに対して、一石を投じたようにも感じている。

参考文献

- Brown, Penelope & Stephen C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- コセリウ, エンジェニオ. 下宮忠雄訳 (1979) 『一般言語学入門』三修社
- 福盛貴弘 (2018) 「授受動詞の判断のゆれについて—「私の妹」は身内か他人か—」『語学教育研究論叢』35: 25-38.
- 福盛貴弘 (2019) 「授受構文「XはYにAをくれた」における1人称とYの親近性について」『外国語学研究』21: 1-10.